

情報化に向けた教員の自己研修とコミュニティ創り

- 「情報」関連の授業公開キャラバンの実践を通して -

長尾 尚*¹ 飯田 英佳*² 石部 睦雄*³

〔概要〕教員研修のあり方が、かなり工夫されるようになってきている。研修内容を決め、適切な講師を選び、会場を設定して参加者を募ることは、必ずしも行政機関や各種学会だけの役目ではなくなった。「教える」より「学ぶ」が強調され、誰もがネットワークを利用できる環境が整いつつあることで新しいタイプの研修可能性が生まれている。今回は、大阪私学の実践を元にして、情報教員の自己研修に結びつくコミュニティ創りの要因を分析してみる。

〔キーワード〕情報教育 情報共有の場 教員研修 自己研修 コミュニティー

I はじめに - 問題提起 -

公立と私学が抱える問題は、異なっている場合が多い。基本的に異動のない私学教員には、研修の機会が限られている。教科「情報」が2003年度よりスタートしたが、各校の担当者数も初年度は、1～2名しか配置されていない。更に今まで理科・数学といった教科を担当してきた教員が、夏休み中に15日間の講習を受講して情報免許状を取得するという経緯をたどったために授業に対して未だに不安を抱えている教員が多くいる。即ち「情報」の授業を通して何を生徒に伝えていきたいのかが、明確になっていない状態が続いている。

大阪府私学教育情報化研究会が「情報」関連の授業公開キャラバンを始めた理由の一つにこのような背景がある。

II キャラバンの概要

この取り組みは、2001年9月より始まり、基本的には、大阪府下の私立中学や高校で情報機器を利用した授業を他校の教員にも

公開するというものである。2003年7月現在で19回目を迎えた。実施時期や内容等によって参加者数にも多少の増減があったが、毎回20数名～40名程度が参加した。また参加者の中には、繰り返し参加する教員も多く見られる。また『「情報」関連の』というある程度幅を持たせた表現を用いて必ずしも「情報」の授業だけに限定しなかったことの効果もあった。その結果、情報担当者に加えて他教科の教員やネットワーク管理関係の事務職などの参加もあった。

毎回の公開授業の指導案、授業記録、公開授業と意見交換会の様子の写真は、研究会サイト (<http://www.osaka-sigaku.net>) に掲載されている。

III 情報共有のプロセス

公開授業の開催が決まった時点でウェブ上に日程や会場校、授業内容等の案内が掲載される。そして実施の1～2週間前に授業者による指導案もアップされる。同時期に参加予定者が、指導案を読んで疑問に思ったことやアドバイスなどを項目ごとに書

き込みできる電子掲示板（清教学園高校：小林直行制作のVBBボード）がオープンする。基本的にこの掲示板は、授業者が抱える課題や悩みに応じて項目ごとに数個のテーマが設定される。参加する教員も参加できない教員もこのボードに書き込みをして、自分の考えを提示することができる。徐々に書き込まれていく掲示板全体に目を通すことで、公開授業に関する「学習のねらい」や「付帯する課題」といったものをおよそ把握できるようになる。

このように公開授業前にネットワークの活用によって意見を交換できることが、継続的な参加者の獲得や、参加者からの主体的な態度を引き出すことに大きく貢献している。

当日は、公開された授業を参観しその後授業者から授業展開についての説明などがあり、関連する質疑応答を行う。次に事前にVBBボードに書き込まれた多様な意見を印刷して配布し、授業に関する問題点などを話し合いを通して明確にしていく。テーマも徐々に公開授業そのものから離れて様々な話題が提供されるが、多くの場合には、オープンエンドのまま終了時間が来てしまう。そのため実質的には、ブレイン・ストーミングを実施しているとも言える。2002年度の途中から、事前に意見のやりとりが可能となったことで意見交換会で討議すべき内容が、短時間に明確になり的を絞った話し合いができるようになった。

授業記録は、何枚もの写真（教室の風景、機器の配置、授業の様子など）と共に2～3週間以内に整理してウェブ上にアップされる。生徒の作品を紹介したり、感想などを入れる場合もあり、この報告を読むだけでもかなり授業の進め方や意見交換会での活発なやりとりが理解できる。

参加者にこれまでの感想を尋ねると

（1）毎回の公開授業の中で、自分の授業に活用できそうなヒントをいくつも得ることができるという意見と共に（2）公開授業後の意見交換会で、他校の先生方と授業実施上の悩みや課題について情報共有でき、不安が解消されることに魅力を感じているという答えが一番多く返ってきた。

このことからこの活動が、教員にとって「自己研修の場」という機能を果たしていることがうかがえる。

教科「情報」と自己研修

教員にとって自己研修が重要なことは、どの教科においても同じである。しかし教科「情報」の場合には、少し事情が異なる。それは、教科「情報」の設置されたねらいが、「生徒の情報活用能力の育成」に主眼が置かれているからである。従って担当教員にもこの能力が強く求められることは言うまでもない。ところが、この「情報活用能力の育成方法」については、各教員がまだ全く模索中の段階であることが明らかになってきた。

今年度に入ってから実施した3回のキャラバンの意見交換会の中で、毎回でてくる話題の一つに授業でのコンピュータリテラシーの扱いがある。コンピュータの操作方法やソフトの利用方法を教えることが、教科「情報」の目的ではないのか、といった考え方が、授業担当者の中にも確実にある。また情報科以外の一般教員は、ほとんどが、教科「情報」に対する正確な認識はなく、「情報」は、コンピュータやソフトの操作を教える授業であると考えている場合がほとんどである。この種の無理解の広まりが、情報担当教員にもマイナス要因となって働いている。

「リテラシーを扱わなければ、実習には

取りかかれぬ」という説明には、ある程度まで頷けるが「情報活用能力をどのように生徒につけていけばよいのか」といった方向には、議論が展開していかない。情報活用能力の実態が把握できておらず、その測定基準が明らかにできていない状況がある。今までの一斉授業方式では、生きる力に結びつくような実践的な能力については、ことさらに意識して取り扱われなかったことが改めて読み取れる。

これまで各教科が、長年行ってきた知識獲得型学習をそのまま継続していくのであれば、教員研修も講習・講義型の伝達方法でもよい。しかし情報活用能力とは、実際に情報の発信・受信の体験が関係する以上、経験的に学習を進める上でどうしても「相手の存在」が必要となる。両者の間にメディアの介在があるなしに係わらず、情報の受発信には、当然のことである。多元的なやり取りを通して、情報の本質やその取り扱い方を学んでいく必要があり、そのプロセスで獲得できるものが、いわゆる「情報活用能力」と呼ばれるものである。

従って「自己」研修という教員研修であるにせよ「相手のある場」で、実際に情報を共有させることにより、初めて実践的な研修に結びつけることが可能になる。そこに今までにないコミュニティの創造が果たす役割がでてくる。

コミュニティの質と運営

3年間夏休み中に実施された15日間の免許講習会では、情報技術の講義や「個人作業としての体験的実習」が主として実施されたが、「生徒に情報活用能力を育てる方法」について現職教員に十分イメージさせることが、結果的に極めて難しかったと言わざるを得ない。

そこで今後は、教員のコミュニティを運営することで、様々な情報の共有を図りながらその組織を維持させていくことこそが、情報化を促進させる教員に対する研修となってくる。同時に新たにそれを実施していかななくてはいけない必然性も浮かび上がってきている。

その際のコミュニティは、同質的な人間の集まりよりも、異質なものを歓迎するといった、幅を持たせた多様性を受容できる共同体であることが重要である。

具体的には、情報担当者だけでなく、幅広い教科の教員で構成するコミュニティであれば、それだけ多岐にわたる柔軟な意見が出やすい。情報関連の授業公開キャラバンが創造してきた教員のコミュニティは、このような点においてまさに幅広く柔軟な構成となっている。

コミュニティを創っていかうとする際に参加者を募る段階で、ある程度上記の多様性の確保を意図したこともあったが、そのことよりもむしろ毎回の意見交換会の中で、視点の異なった意見を聞けるということに魅力を感じた参加者が、そのような体質を強く支持し認めてきた結果と考えた方が適切である。

コミュニティの運営側としては、参加者が、自ら意見を表明する機会が提供されていて基本的には、何を表現しても受け入れられる環境を整備することがその役割である。参加者の一人一人が、自分の所属するコミュニティの多様性を強く実感できるようにしくみができていなければ、実際に多様性を内在させるメリットがコミュニティ内で活かされてこない。

キャラバンでのコミュニティ創り

電子掲示板で様々な書き込みが、すぐに

閲覧できるというしかけは、上記の環境をサポートしていると言える。VBB ボードという電子掲示板は、その画面設計に重要な工夫がある。その特徴は、記述内容が、容易に把握できるところにある。また匿名性を採用していることや、記入後に自分の意見を削除することも認めているために、記入者側からすれば、極めて書き込みやすい環境が提供されている。

上記のような環境が整うことと、それを運営していくこととは、相互に補完的な意味合いがある。つまり環境さえ整えば、自然にコミュニティが目指す方向に成長していくわけではない。

具体的には、環境を活かすには、様々な意見を誘引するような書き込みが必要である。そのことは、最初の意見がある程度書き込まれないとその後の書き込みが順次増えていかないことからわかる。ある量を超えると自分と異なった視点の意見に面白みを感じて書き込みが急に増えていく傾向がある

ネット上と同様にお互いに対面している意見交換会の場合にもそのような配慮が必要である。授業公開キャラバンには、情報科以外の教員が多いことは前述したが、それ以外にも企業関係者、大学生、大学院生、学校事務職といった様々な立場からの参加がある。また同じ教員でも公立学校の教員は、そのバックグラウンドが私学教員とは全く異なるために当然、別の意見を持っている場合も多い。

このように見てくると「ネット上での意見交換」と「対面式である授業公開当日の意見交換」という「2つの意見表明の場」

のバランスも重要になってくる。この2つの環境を合わせた所に教員のコミュニティが存在していると言える。

まとめ

以上で見てきたように情報教員の自己研修に結びつくようなコミュニティ創りに大きく貢献した要因として、(1)ネットワークの有効活用と(2)ネット上で多様な意見を表明できる場の創造、そして(3)誰でも参加できる雰囲気を持った対面の機会の提供、の3つがあることがわかった。

最近、ウェブを使った e-Learning と呼ばれる教員研修形態も増えてきた。またトップダウン式で、受講者が講師の話を一方向的に聞く講義形式に対して、参加者が主体的に関わるワークショップ形式の研修会も人気がある。しかし実施形式でなく、研修によって養いたい資質が従来と異なる教員研修を目指すには、新しい枠組みをもったシステムの検討が必要である。大阪私学が2年近く継続して実施してきた情報関連の授業公開キャラバンを通じた教員のコミュニティ創りは、今後の教員の研修のあり方に重要な示唆を与えている。

参考文献：水越敏行（2003）『ICT 教育の
実践と展望』 日本文教出版

*1 takashi nagao : 大阪信愛女学院メディアセンタ : t-nagao@osaka-shinai.ac.jp

*2 hideyoshi iida : 四條畷学園高等学校 : iida@hs.shijonawate-gakuen.ac.jp

*3 mutuo ishibe : 大阪信愛女学院高等学校 : m-ishibe@osaka-shinai.ac.jp